

問題 2. 子宮頸部粘液性腺癌内頸部型

症例：67歳、女性。がん検診異常。

検体（採取法）：子宮頸部綿棒擦過

染色：パパニコロウ染色

問題：正しいものに○、間違っているものに×を下さい。（VS：バーチャルスライド）

1. VSでは、腺管状や乳頭状集塊がみられる。○
2. VSでは、明瞭な核小体をもつ異型核がみられる。○
3. HPVと強い関連性がある。○
4. 本邦では近年患者数の減少がみられる。×

解説

67歳という年齢から頸部病変としては、萎縮性膣炎、CIN 1-CIN 3、扁平上皮癌、腺癌などの病変の可能性が考えられる。本例では血性、蛋白融解性の背景を示し、ゆるい結合力を示したシート状細胞集塊や軽度細胞が重積している乳頭状集塊を認める。また核の偏在を認める。核の大小不同や核縁の不整肥厚を認め、クロマチンの不規則な分布や大型核小体の出現を認める。そして隣接した核との配置が不規則である。細胞質は豊富で好塩基性を示す。以上より偏在核や集塊の形状から上皮系の異常として扁平上皮系よりは腺系が考えられる。腺系の異常としては隣接した核との配置が不規則なことや腫瘍性の背景より上皮内腺癌より浸潤癌が考えられる。発生部位は豊富な細胞質や細胞径より、内膜より頸部が考えられる（図1, 2）。最終診断は子宮頸部粘液性腺癌内頸部型（図3, 図4）であった。

病因としてHPVが90-95%を占める(McCluggage WG:New developments in endocervical glandular lesions. Histopathology. 62 (1): 138-60, 2013)。また本邦において頸部腺癌は1994年に500名罹患が2003年に712名と増加している（日本産科婦人科学会・婦人科腫瘍委員会患者年報）。

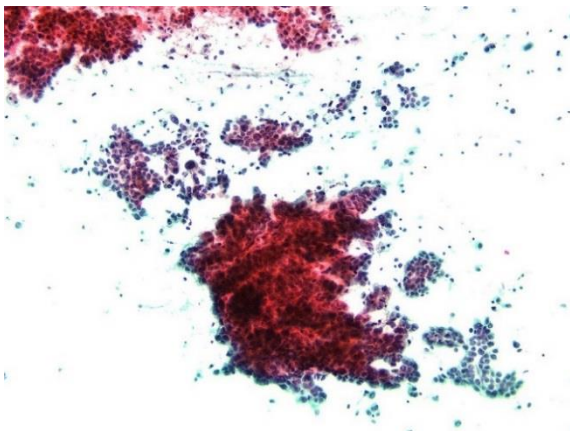


図 1

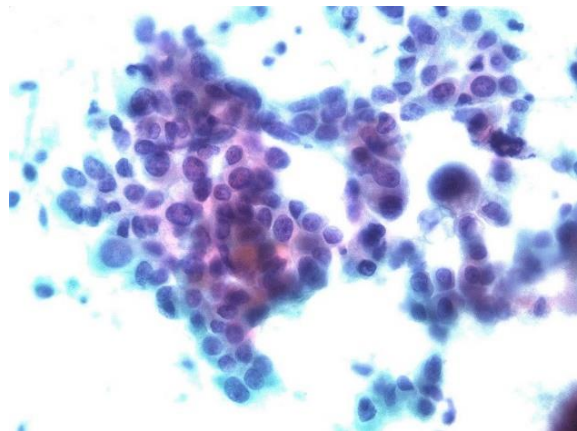


図 2

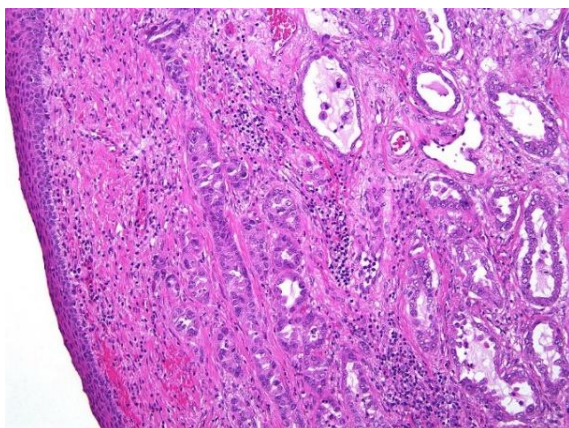


図 3

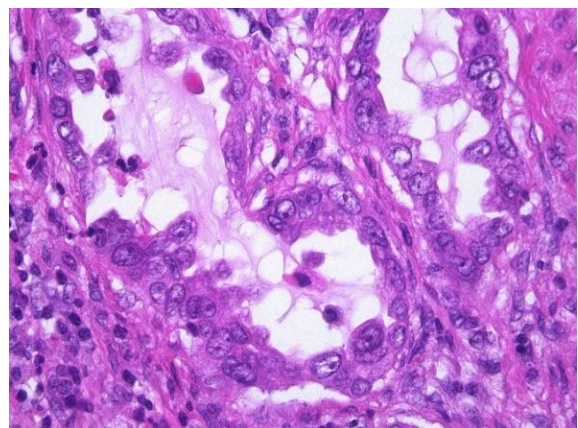


図 4